

vol.51

## 奇跡の社会

文 島田 雅彦

text by Masahiko Shimada

ストルガツキー兄弟の原作を、アンドレイ・タルコフスキーが映画化した『ストーリーカー』という名作があるが、「ストーリーカー」と呼ばれるガイドが物理学者と文学者を隔離地域の「ゾーン」に案内しながら、不毛な議論に明けくれる二人に対して突然、「詩を読みます。聞いてください」といい出し、監督の父アルセーニー・タルコフスキーの詩を引用するシーンがある。いきなり、暗記している詩の一節を他人と共有する、その唐突さに戸惑ったが、ロシアでは知識人に限らず、詩を介したコミュニケーションの取り方は割と一般的である。酒を酌み交わす時も、ウオッカをグラスに注いでも、すぐには飲まずに、詩の一節を引用したり、皮肉や風刺を盛り込んだ小話を披露したりといった文学的なセレモニーを入れる。チャイコフスキー音楽院の天才クラスのプロ・アノ・レッスンを覗いたことがあるが、師匠と弟子はレッスン室でピアノを弾かず、しきりにある詩の解釈を巡って議論をしていた。

このように極めて高度な文学鑑賞の環境が少なくともソビエト時代までは保たれていた。ただ、ソビエト時代は、検閲と言論統制が厳しく、多くの優れた作品が発禁になっていた。それに対抗し、地下には発禁本の流通ルートがあり、秘密のソサエティーが形成されていた。サミズダートと呼ばれる地下出版の実物を見せてもらったことがある。コピー機も印刷機もないので、全て手作業で作られた「写本」である。カーボン紙を一枚挟んでタイプ打ちをすると、写しが二部できる。一部は自分の手元に置いて、もう一部は一番信頼のおける友人に預け、原本は持ち主に返す。

もし、発禁本の所有、閲覧が当局にバレたら、逮捕、流刑、追放は免れないので、読書家同士の信頼関係、秘密厳守の原則は徹底しなければならず、発禁本を一晩借りるのに自らのパスポートを担保にしたりしていた。そうまでして読みたい本があったということ、また一部ずつしか複製ができない写本にも拘らず、多いものでは一万以上も流通していたらしい。今だけ、カネだけ、自分だけの世界ではあり得ない奇跡の社会がかつては存在したのだ。

### Profile

1961年東京生まれ。1984年東京外国語大学ロシア語学科卒。在学中の1983年『優しいサヨクのための嬉遊曲』でデビュー。主な作品に『自由死刑』、『退廃姉妹』（伊藤整文学賞）、『悪貨』、『虚人の星』（毎日出版文化賞）、『君が異端だった頃』（読売文学賞）ほか多数。『忠臣蔵』、『Jr. バタフライ』のオペラ台本もある。芥川賞選考委員。法政大学国際文化学部教授